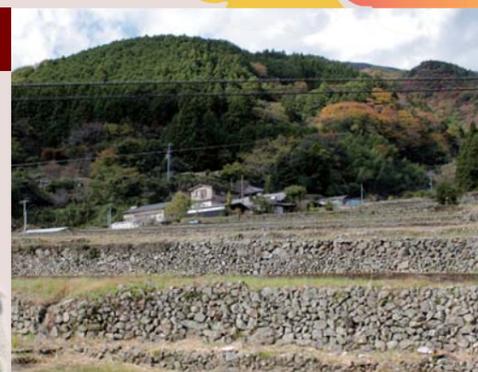
怪しく不思議な世界への道標（みちしるべ）

から川流し

物部町久保高井

【から川流し】出典…土佐化物絵本（高知県立文学館蔵）

▲この地は土砂崩れの後原野山林となっていたが、昭和７年ごろから開田され、現在はなだらかな棚田の風景が広がっている。

　昔から主が住むと恐れられた轟の釜という淵が、久保の冬谷という川にあった。久保家の当主・久保源兵衛は豪胆な男で、轟の釜のたたりにまつわる恐ろしい話を一笑に付し、「明日冬谷でから川流しを行い、主などいないと証明してみせよう」と宣言した。

　から川流しとは、劇薬を川に流して魚を取る方法。源兵衛の一党がそれを川に投げ入れると、水面は半時もたたず白い腹を見せて浮かぶ魚でいっぱいになった。その夜、源兵衛の屋敷では飲めや歌えやの大宴会となった。

　翌日、恐ろしいほどの大暴風雨と雷鳴が一昼夜続き、ついに源兵衛の屋敷の裏山が土砂崩れを起こした。幽鬼が叫ぶような「ウォー」という恐ろしい声が響き、その瞬間大地が鳴動し、一瞬のうちに崩れ去ったという。一族郎党一人残らず埋没し、28人が死に絶えるという大惨事であった。

雌雄の大蛇

▲男池に生える赤芽柳の大樹。遣唐使が持ち帰ったものの２代目とも、お坊さんが京から持ち帰ったものともいわれる。

物部町神池
男池と女池

　韮生往還や高板山越えの宿場、久保や笹越えの道が通り、かつては交通の要衝として栄えたであろう神池には、大小2つの池がある。

　大きい池が女池、小さい池が男池と呼ばれ、女池には雌の大蛇が、男池には雄の大蛇がそれぞれ棲（す）んでいた。

　ある時、門明某（なにがし）という鍛冶屋が大蛇退治に乗り出した。真っ赤に焼いた大金槌（おおかなづち）を池に投げ込み、自らは短刀をくわえて飛び込んで、三日三晩大蛇を追い回したという。これにはさすがの大蛇も恐れ入り、讃岐の満濃池へと逃げていったという。

　かつて女池の周囲はヒノキやクスノキの大木が林立していたが、地元の人はたたりを恐れて斧（おの）を入れなかった。しかし、長宗我部氏が神池を攻め、池の中に伐り込んでしまったという。その後徐々に埋め立てられて水田となったが、現在でも田の底には材木が埋まっているといわれる。

土地に息づくものがたり

玉織姫の伝説

▲３段８２㍍の大瀑布は、日本の滝百選にも選ばれている。深い藍色の滝つぼは、いまも神秘的な光をたたえている。

香北町猪野々
轟の滝

　落ち延びて猪野々柚ノ木の里に暮らしていた平家の武将・伊和三太夫。彼には美しい娘があり、里の人々から玉織姫と呼ばれていた。

　ある日、玉織姫が轟の滝のつり橋を渡っていると、突然まばゆい光に包まれ滝つぼの中へと引き込まれてしまった。

　三太夫は愛娘の身を案じて轟の滝まで駆けつけると、滝つぼ目がけて飛び込んだ。滝つぼの中には御殿が建ち、その中に玉織姫がいた。しかし玉織姫は、泣きながら「私はもう帰ることができません」という。三太夫が訳を聞くと、奥から立派な若侍が出てきて大蛇へと姿を変えた。玉織姫は「私はこの方と添い遂げることとなりました。親孝行できないことをお許しください」と言い、三日三晩三太夫をもてなした。そして３巻の反物を手渡し、今生の別れを告げた。三太夫が滝つぼを出て屋敷に戻ると、何と３年の月日がたっていたという。

あまのじゃく

台風で木が倒れて
建物がちょっと壊れちゅう！
まっことおじたぜよ

香北町韮生野
大川上美良布神社

　大川上美良布神社に祭られている神々が空から地上を見ていると、あまのじゃくが小川の出尻で何かしている。神々があまのじゃくに問いかけると、「川が曲がっちゅうき石をどけて真っ直ぐにしゆうがよ」という。神々はいたずら心で「明日の朝までに川を真っ直ぐにできるか。できなければ我々の言うことを何でも聞くと約束せい」と、あまのじゃくに持ちかけた。「どうせできるわけがない」と言われ、意地になったあまのじゃくは賭けを受け、夜も眠らずに石をどかし続けた。

　さて、夜明け近く。心配になって様子を見に来た神々は目を疑った。もうすぐで完成というところまで作業が進んでいたのだ。慌てた神々はニワトリに変身し、一番どりの声を上げた。だまされたあまのじゃくは神々に言われるまま、いまも神社の蔵で屋根を持ち上げているそうな。